苫前町古丹別地区流雪溝利用者を対象とした アンケート調査報告

A Research for the users of snow-flowing gutters in Kotanbetsu

小西 信義，野呂 美紗子，原 文宏（(一社）北海道開発技術センター），
西 大志（苫前町まちづくり企画）
Nobuyoshi Konishi, Misako Noro, Fumihiro Hara, Daishi Nishi

１．はじめに

流雪溝は導入から 30 年が経過し,この間,設備自体の老朽化や沿道地域の過疎高齢化といった社会情勢の変化もあり利用状況の課題も指摘されている.

今後の流雪溝運用方法の改善策を検討するために，沿道住民を対象としたアンケート調査を行った．本稿では，その結果を報告する.

２．アンケート調査の概要

苫前町古丹別地区流雪溝の概要や置かれている状況については，小西ら [1)]に詳しく，本稿では割愛する．以下，沿道住民の高齢化や施設自体の老朽化といった古丹別流雪溝の実態をより把握するために行ったアンケート調査概要について記載する.

調査期間は平成 28 年 11 月 15 日～25 日．調査対象は同流雪溝管理運営協議会が作成する利用者名簿一覧にある流雪溝沿道住民全 140 世帯を対象とした．調査方法は高齢などの理由により記入困難な方に対しては優先的に対面式調査を行い，基本は郵送式調査を行った.

主な質問項目は，世帯主の基本属性，家屋除雪の有無や箇所，利用ルート，投雪方法など家屋における除雪や流雪溝の投雪作業について，流雪溝があることでよかったことや困っていること，今後の流雪溝の必要性，今後必要な取組などの流雪溝に関する考え方だった．回答率は 50.7%と高く，流雪溝に関する関心の高さが示唆される.

３．アンケート調査結果

（１）回答者の属性

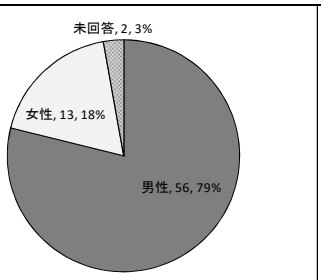

図１　回答者の性別（n=71）

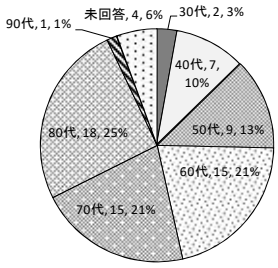

図２　回答者の年齢（n=71）

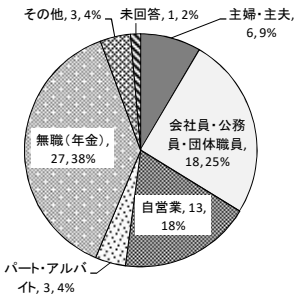

図３　回答者の職業（n=71）

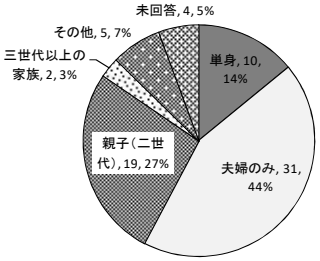

図４　回答者の世帯構成（n=71）

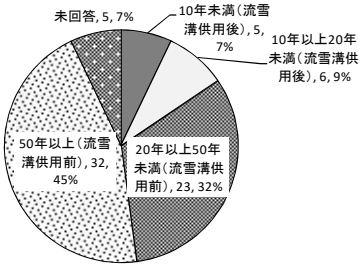

図５　古丹別地区居住年数（n=71）

Copyright © 2017 公益社団法人日本雪氷学会北海道支部

回答者の属性としては単身世帯や夫婦二人世帯がもっとも多く，60 代以上の回答者が 7 割近くを占めた．古丹別流雪溝の供用前から居住する世帯が 7 割以上を占め，流雪溝の供用前の除排雪体制を経験した世帯から回答を得ることができた．

（２）回答者の除雪作業の状況

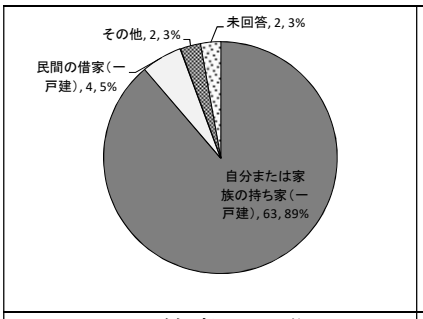

図 6　回答者のお住まい（n=71）

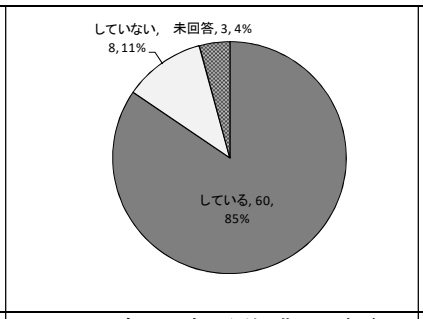

図 7　家屋除雪作業の有無（n=71）

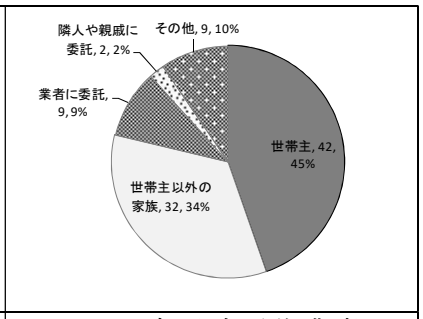

図 8　家屋除雪作業者（n=97）　複数回答可

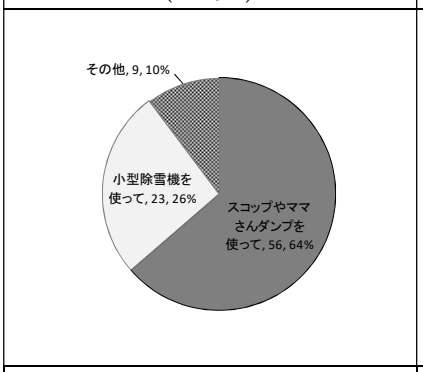

図 9　投雪方法（n=88）　複数回答可

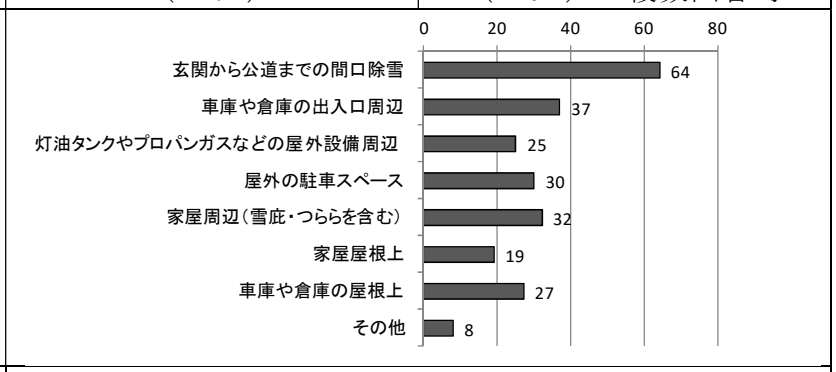

図 10　家屋除雪箇所（n=234）　複数回答可

回答者において，一戸建ての持ち家に居住する世帯が 9 割を占め，居住する家屋の 8 割以上が除雪作業を行っている．家屋における作業者は世帯主とその家族が 7 割を越え，大半の世帯が自身の家屋の除雪を自前で行っており，業者への委託は 1 割を下回っている．投雪方法は人力が 6 割を越え，小型除雪機の利用も 3 割近くを占めている．

（３）流雪溝利用に対する考え方（流雪溝があることによる冬の暮らし快適さ）

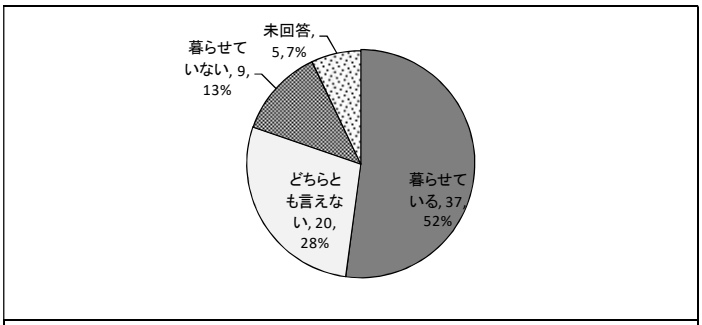

図 11　流雪溝があることで快適な冬を暮らせていますか？（n=71）

回答者のうち半数から，流雪溝があることで快適な冬の生活を暮らせているという回答が得られた．一方，「どちらとも言えない」が 3 割近く，「暮らせていない」が 1 割いる．

冬期の快適性別で見た流雪溝があることの長所は，冬の生活の快適性に関わらず冬道のバリアフリー化（「歩道が歩きやすいから」「道路の

Copyright © 2017 公益社団法人日本雪氷学会北海道支部

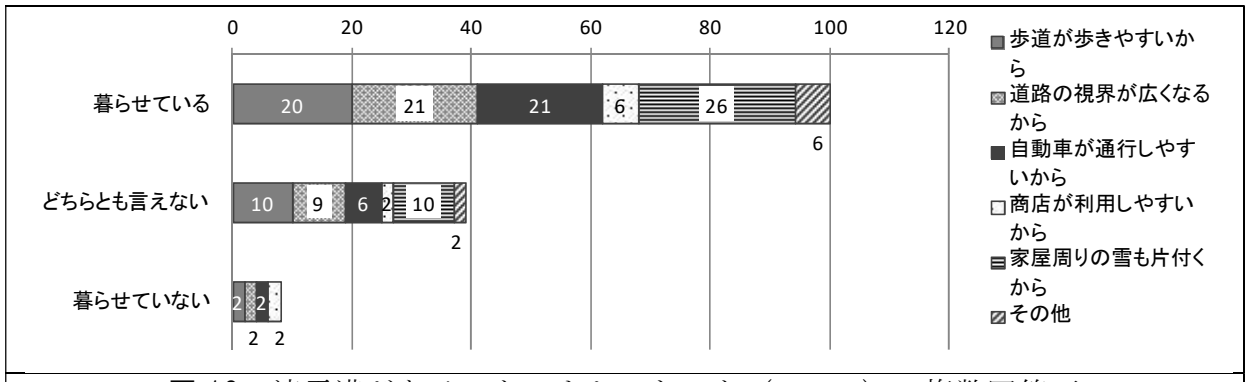

図 12　流雪溝があることでよかったこと（n=122）　複数回答可

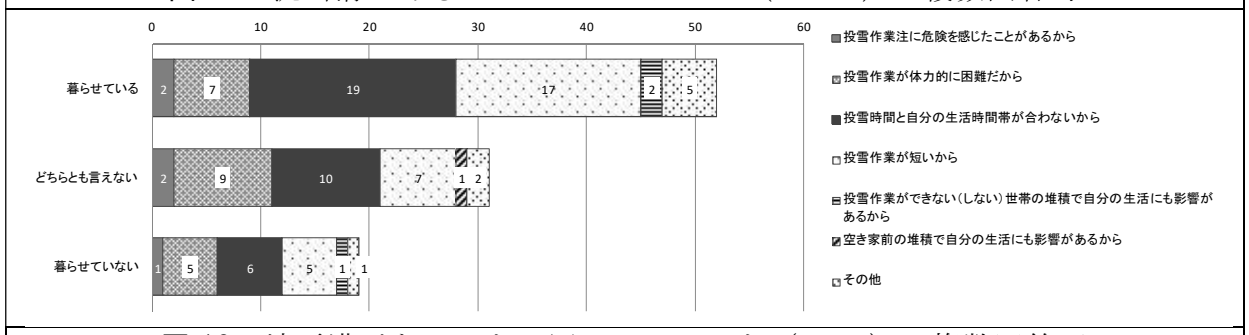

図 13　流雪溝があることで困っていること（n=78）　複数回答可

視界が広くなるから」「自動車が通行しやすいから」）で実感しているようである．困り事については「暮らせている」方は主に投雪時間（「投雪時間と自分の生活時間帯が合わないから」「投雪作業が短いから」），「どちらとも言えない」「暮らせていない」方は体力面（「投雪作業が体力的に困難だから」）に集中した．

（４）流雪溝利用に対する考え方（流雪溝の必要性）

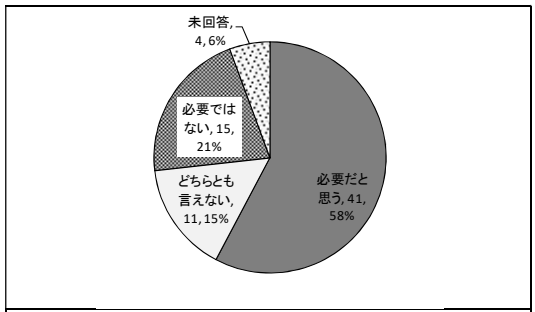

図 14　今後，流雪溝は必要な施設だと思いますか？（n=71）

今後の流雪溝が必要だと思う割合は 6 割近く，「どちらとも言えない」が 1 割強，「必要ではない」が 2 割を占めた．

（３）流雪溝利用に対する考え方（流雪溝があることによる冬の暮らし快適さ）と総合すると，流雪溝の必要性は冬道のバリアフリーを享受する施設として理解はしているが，体力面での作業の困難さやライフスタイルと投雪時間とのミスマッチが指摘されていると読み取れる．

（５）今後冬の快適な暮らしを確保するため必要な取組

次頁図 15 が示すように、流雪溝に対する今後必要だと思う取り組みについては，投雪時間延長や投雪作業の時間帯の調整への要望や小型除雪機による除雪代行者の調達が多く寄せられた．特に，流雪溝の必要性については「どちらでもない」「不必要」という方は，「流雪溝を停止し，ダンプカーによる運搬排雪に切り替える」という意見も目立った．また表 1 の自由回答では，投雪ルールを遵守しない人の指摘，投雪作業時間の見直し，道路管理者による道路除雪への困り事，流雪溝が本来道路管理者との協働による除排雪施設であるにも関わらず，沿道住民がなぜ道路除雪による堆積を投雪しないといけないかという回答もあった．

Copyright © 2017 公益社団法人日本雪氷学会北海道支部

図 15　今後，あなた自身や古丹別地区全体において，冬の快適な生活を確保するために，どのような取り組みが必要だと思いますか．（n=88）　複数回答可

表 1　自由意見

男性	61 歳	流雪溝があることは有難い，但し，高齢化により投雪可能世帯が，少なくなっているのは事実．特に A ルートは高齢化が他ルートよりも進行しているため，担い手がいない．
男性	75 歳	投雪時間のルール守る人が年々少なくなりルールを守らない人が増える．また流雪溝運用当初からルール守らない人が多い．ショベルカーなど所有しているところに多く，ルール守っていない．上記のことで管理者または委託業者がもう少しどうしたらよいか考えなければ，ルール守る人が年々少なくなること間違いなし．
男性	82 歳	これから単身の高齢者や空き家の増加などから町内の均一した除雪が困難になってくると思われます．かといって，私自身，自宅及び近所の高齢者住宅の除雪の手助けで手一杯といったところです．作業の効率化，作業人員や除雪機の確保が望まれます．
男性	57 歳	住宅の積雪量より道路の除雪の雪を捨てる量が多いので投雪者に負担がかかる．
女性	未回答	道路の固い雪を置いて行ってもらうと困る．

４．まとめ

流雪溝利用に関わる実態を把握するため，古丹別地区流雪溝の沿道住民に対して，質問紙調査を行った．流雪溝が冬の快適な暮らしに貢献できているという回答が大半を占めたものの，投雪時間などの投雪ルールの検討や共助の担い手の確保などがニーズとして挙げられた．流雪溝という施設自体が道路管理者と沿道住民との協働を前提としていることから，上記の課題の解決には，流雪溝をめぐる道路管理者と沿道住民との協働関係の再構築が求められる．今後は，施設自体の老朽化の実態調査も行いつつ，道路管理者と沿道住民との協働の再構築に向けた基礎資料を蓄積していきたい．

【引用文献】

1) 小西信義ら，2016：流（融）雪溝事始～苫前町古丹別地区を事例に～，北海道の雪氷，**35**，79-82.

Copyright © 2017 公益社団法人日本雪氷学会北海道支部